

近く右に三保の松原を望み、天羽衣を想起し、左に奥津の清見寺を眺め、遠くは田子の浦邊の白波の美しきと、八朶の芙蓉峰の秀靈とを賞し、三保の松原に遊びて清水港に宿し、翌日は江尻奥津を経て清見寺に到り、蒲原を過ぎて岩淵に宿り、歩いて原に向ひて左富士の奇勝を探るもあり、瀛車に搭じて坐ら風光の明媚を愛づるもありて、人さまざまに旅行を了りて、十七日午後八時十分新橋著にて歸京したり。

## 関連事項

### ① 京都市立絵画専門学校設立

明治四十二年一月、京都市立美術工芸学校評議会は絵画専門学校設立を文部大臣に申請し、その結果、同年四月、京都市立絵画専門学校が設立された。当初、生徒数は一五〇名、修業年限は予科が二年、本科が三年、研究科が二年で美術工芸学校（吉田町）の校舎の一部を仮校舎として授業を開始した。はじめは大野盛郎が校長事務取扱をつとめ、四十三年三月より松本亦太郎が校長（美術工芸学校長兼任）に就任。竹内栖鳳、菊地芳文、谷口香嶠、山元春拳、西山翠嶂、合田一峰、徳田隣斎、菊地契月、庄田鶴友、辻華春らが実習の指導にあたり、中井宗太郎は美術史を、池辺義象は国文学を、江馬務は風俗史を教えた。明治四十四年三月には入江波光、小野竹喬、榊原雨村、榊原紫蜂、土田麦僊、星野空外、松宮芳年、村上華岳ら八名が卒業する（野長瀬晩花は中退）。

### ② 「生徒心得」改正

明治四十二年四月、「生徒心得」（第一条、第二十一条）に次の二ヶ条が付け加えられた。

第廿二 生徒ニシテ本校内ニ公告貼札等ヲ爲サントスルトキハ豫メ本校ノ許可ヲ得テ後チ指定ノ場所ニ限リ之ヲ揭示スルコトヲ得  
第廿三 家族若クハ同居人中又ハ住所ノ近傍ニ於テ激症傳染病ニ罹リタルモノアルトキハ速ニ其旨ヲ本校ニ届出ツヘシ

（『東京美術学校一覽』從明治四十三年至明治四十四年）

### ③ 福地復一（天香）死去

『東京美術学校校友会月報』第八卷第一号の「芸苑彙報」に次のように記された。

○福地復一氏逝く 圖案家として斯界に功勞ありし福地復一氏は、昨年来胃癌を患ひ、大學病院に入りて療養中なりしが、醫藥効なく「明治四十二年」七月廿二日午前三時芝高輪北町の自宅にて逝去せり。氏は伊勢國宇治山田の人にして、同縣師範學校卒業後、上京して三田芝英語學校に入り、明治二十二年伊勢神苑會の依囑にて、初めて歴史博物館の設計に従事したるを圖案界に身を投ずるの動機として、其後博物館、東京美術學校等に奉職し、又内外博覽會、共進會等の設計及び審査に従事して、三十年の巴里博覽會の際には、審査員として同地に遊び、歸朝後は日本圖案會を設立して専ら意匠圖案界に貢獻する傍ら、美音會を起して歌舞

音曲の發達を圖り、其功績世に認められんとするに及びて遠逝せしは惜むべし。享年四十九。

#### ④ 川端画學校設立

本校教授川端玉章は公務の傍ら自邸の隣に新たに画學校を設けて經營に当たることとなり、明治四十二年九月九日、川端画學校の開校式が行われた。最初の募集生徒数は五十名で、同校の内容については『美術新報』は次のように報道した。

○川端畫學校新設 日本畫の巨匠川端玉章翁は頃日純日本畫の日々に衰退に赴くは主として正當なる繪畫教育の方法普及せざるに基けるものなりとし爰に一の私立畫學を創立し唯一の官立美術學校を輔翼し且は不完全なる私塾的教育の情弊を打破せんと決心し自ら資を投じて校舎建築の計畫をなせしを同門の出身なる高橋玉淵、福井江亭、端館紫川、諸星成章、戸田玉秀、島崎柳塙、田中頼章<sup>〔壇〕</sup>其他の諸氏洩れ聞きて大に賛成し門下一統を糾合して其事業を完成せしむることとなりたるに翁も其情誼の厚きを感じ師弟戮力して經營するに決し先づ其敷地として川端邸の隣地なる市有地三百坪許を拂下げ取敢ず五千圓の工費にて第一期の工事即ち六七十坪の總二階建校舎の建築に取掛り遅くも來る四月頃には開校せんと急ぎ居れり、右につき美術教育の經驗に富める正木〔直彦〕美術學校長を始め濱尾新、高嶺秀夫諸氏も非常に賛成し種々有益なる注意を與へられつゝある由 尙校長兼教頭は玉章翁自ら之にあ

たり、教授は門下の先輩に選任し科目は差當り豫科本科専科及夜學部に分ち將來は女子部をも設くる豫定なるが豫備科の入學程度は小學校高等科卒業以上にて修業年限二箇年にして隨時入學を許し△本科は修業期限五箇年にして人物、花鳥、山水并に必須なる學科を教授し△専科は各科目中一科目を撰びて專攻するものとす 又本校教授法の特徴は修業期限を五箇年とせるも隨時成績品を提出して卒業證書を請求することを得せしめ専科も同様成績によりて修業證明書を與へ眞の技術養成を圖るに在といふ 又開校の曉には翁<sup>〔自ら〕</sup>自校長兼教頭たるの外に、繪畫教員は翁<sup>〔自ら〕</sup>自これを門下に採り學術教授は他よりこれを聘すべしと。<sup>〔万朝報記事〕</sup>（萬朝）

○川端畫學校設立協贊會の組織 右に付同門出身の先輩によりて成る幹事會は九日川端邸に於て開會協贊の實を擧ぐる爲め川端畫學校設立協贊會を組織し其事業の一部として協贊會天真會といふを設置し會員五百名を募集して金員の寄附を請ひ之に對し協贊會員即ち川端門下諸氏の揮毫を抽籤にて贈呈する筈なるが、發會は來る五月九日芝公園内紅葉館に於て舉行するに決定し事務所を川端畫塾内に設け庶務會計其他の係員をも定めて幹事諸氏之を擔當すと

（『美術新報』第七卷第二十一号。明治四十二年一月）

○川端畫學校の認可 同校は愈々此程其筋より設立の認可を得たるを以て遠からず校舎の新築工事に取掛由 又同校規則は各科の技術は豫科には臨畫寫生を課し本科には臨畫、植物寫生、動物寫